（明治二十五年十二月～同二十八年五月）であった。川崎の後は関保之助、福地復一、前田香雪、および久米桂一郎（西洋考古学担当）らに引き継がれた。

川崎千虎の「考古学」講義に関する資料としては左記のものが現存する。

「考古学」一冊

これは原安民が鋳金科第二年のとき（明治二十五年九月～同二十六年七月）に筆記したノートである。原は普通科終了後、規則改正（明治二十五年）により直ちに本科（鋳金科）第二年となったため、本科第一年の履習科目である「考古学」を第二年で受講したと考えられる。

このノートによれば、川崎千虎は最初に西洋の考古学の時代区分について一応説明し、自分としては今泉雄作の立てた時代区分をとりながら、それを簡略化して、神代、太古（神武～光仁）、上古（桓武～近衛）、中古（後白河～花園）、近古（後醍醐～後陽成）、近古（後水尾～考明）という区分を用いると言っている。そして、その区分に従って各時代の人事（儀式、祭祀、技芸、游興）、衣服（男女服装、携帯品、武装および武器）、食（飲食）、住（建築、装飾、庭園）、地理（古今の沿革）について述べると言っている。しかし、講義は川崎の本領である衣服（殊に武装、武器）に重点を置いて進められている。

川崎千虎は大和絵系統の画家であり、学者でもあった。本校の講義を始める以前から長編の「本邦武装沿革考」を『国華』に発表している。

関保之助の「考古学」講義

関保之助は本校第一回卒業生で、石川県工業学校教諭の職を辞して明治二十八年十二月に母校嘱託となり、翌年助教授となったが、美術学校騒動の際に辞職している。講義に関する資料としては山下英夫（明治三十二年鍛金科卒）の筆記ノート「関保之助氏口述、考古学儀式及武器之部」がある。このノートには明治三十年九月の年記があり、はじめの部分は朝廷における諸種の儀式とその用具、支那の儀式との関連などの図入り解説が筆記されている。そのあとに、関が配布したと思われる印刷物の綴入みがあり、内容は序論・有職（公卿の礼式作法）と古実（武家に関する事柄）についての説明、本論・武家の故実（弓、矢、靫、槍、旗、鉾、鉄炮（ママ）、刀剣、甲冑等々各種の武器の変遷を古文献や実物に即して説く）からなる。さらに、そのあとにこの印刷物の甲冑の部分の続きに該当する筆記と法衣に関する筆記があってノートが終っている。このノートからみて、関の「考古学」も川崎千虎と同様、専ら有職故実に関するものであったことがわかる。

加納夏雄、黒川真頼の「金工史」講義

この科目は明治二十三年の規則改正後、美術工芸科金工専修第一年生の履習科目として新設された。最初の担当者は正式記録の上で

は黒川真頼であるが、左記資料をもってすれば黒川以前に、あるいは黒川と一時期並行して加納夏雄が担当したことがわかる。

一、『金工鑽業講話、全』加納夏雄先生口述東京美術学校蔵版昭和十二年四月騰寫、一冊、本学附属図書館蔵。

この冊子は昭和十二年に清水南山が工芸科彫金部講義用に騰写したもので、左の二篇に分かれている。

イ、「明治二十五年ヨリ二十六年十一月迄ノ談話ノ大旨ヲ記ス、金工鑽物語之第壹、夏雄」

この篇の冒頭には「廿五年十一月改正規則ニ一年生ニ金工史金工沿革ノ概要ヲ講受スト有マスカラ生徒御一同ニ話ヲ致マス」云々という加納夏雄の言葉が記録されている。末尾には「昭和十二年三月末日寫之、清水亀蔵」とある。

ロ、「明治廿六年十二月三十日、於東京美術学校、金工鑽業講話追考大旨、金工沿革ノ概要ヲ講授ス」

こちらは標題の日から翌二十七年十一月十九日までの間の講義を筆記したものである。

この冊子の中で述べられているのは後藤祐乗以下明治に至るまでの彫金家列伝であり、作品に重点が置かれているところに、夏雄の技術家らしい講義ぶりが窺われる。

加納夏雄の講義内容をさらに正確に知るには『日本美術』（第三号～第二十二号。明治三十一年十二月～同三十三年八月）所載の「彫金談」が参考になる。これは明治二十七、八年ごろの夏雄の金工史講義を岡部覚弥（明治二十八年彫金科卒）が筆記したものに基づいており、記述は詳細で挿図も多く載っている。岡部家にその底本も残っている。

黒川真頼は明治二十六年九月に「金工史」「漆工史」兼担を嘱託された。講義筆記としては原安民の「黒川文学博士述、金工史筆受一、二」があり、これは記述内容から判断して明治二十六年十一月から翌二十七年六月の間の全講義の筆記であることがわかる。内容は加納夏雄のそれと大いに異なり、金（カネ）の字義に始まり、わが国神代における金の出現、太古の金工（八咫鏡、日矛、太刀、小刀、斧、鐸）から徳川時代の金工に至るまでを文献学的に説いている。なお、『錦巷雑綴』第五、第六巻（明治二十八年六月、同年十月）にはこの太古の金工史の一部（筆記者海野豊）が掲載されている。

伊東忠太の「建築装飾術」講義

この科目の最初の担当者は久留正道（明治二十四年六月～同二十六年嘱託）であるが、講義関係資料は現存しない。久留の後任となったのは伊東忠太（明治二十六年二月～同年九月嘱託）で、その講義は原安民が克明に筆記している。原のノートは三冊あり、いずれも末尾に「廿六年十一月六日綴之」と記されており、また、毎回の講義の月日（十二月十三日より四月五日に至る。）も記入されている。したがって、上記の伊東の雇用期間と合わないが、あるいは伊東は正式雇用の二ヶ月前から開講し、六ヶ月前に終了したことも考えられる。

このノートによれば、伊東の講義に先立って一日だけ小島憲之